

《翻 訳》

ハリソン自伝（後篇）

ヴィクトリア朝のある女性学者の一生

ジェーン・E・ハリソン 著
齋 藤 裕 訳

《REMINISCENCES OF A STUDENT'S LIFE》(1925)

Jane Ellen Harrison

(translated by Hiroshi Saito)

キーワード

ヴィクトリア朝 (Victorian Age), ケンブリッジ・ニューナム学寮 (Cambridge Newnham College), ヨークシャー (Yorkshire), フレイザー『金枝篇』 (James Frazer『Golden Bough』), テニソン (Alfred Tennyson), ギリシャの宗教 (Religion of Greece), ベルクソン (Henri Bergson)

二 章

《ケンブリッジとロンドン》

ケンブリッジでは、偉い人々がわたしの生活に姿を現わすようになりました。女性のコレッジ [Newnham学寮. 1870年創設. ケンブリッジ大学の女子学生専用学寮としては1869年のGirton学寮に次いで古い. オックスフォード大学の女子専用学寮としては Lady Margaret Hall 1878, Somerville 1879などが古い] は物珍しかったので、つぎつぎに著名な訪問者が、名所の一つとして、わたしどもをわざわざ見物するために連れて来られました。ツルゲーネフ [Ivan S. Turgenev 1818-83 ロシアの小説家. 晩年の大半を外国で送った. 『獵人日記』, 『父と子』] が来ました。で、わたくしがその案内を仰せつかりました。これは絶好の機会です。思いきって、一言でも二言でもよいから、ロシア語を話してくださるように頼んでみようかしら？ 彼はさながら優しい、老いた、まっ白なライオンのように見えました。でも、ああ！ 彼が話したのは流暢な英語でした。ひどく失望したものです。次にはラスキン [John Ruskin 1819-1900 英国の著述家・批評家. オックスフォード大学教授. 『現代絵画論』『ヴェニス

石』『胡麻と百合』] が来ました。わたしたちの小さな図書室を見せると、彼はとがめるような目付きで眺めていました。やがて、重々しく言いました。「若い娘が手に触れる本は、どれも羊皮紙で装幀したものでなければならない」わたしは赤のモロッコ皮とスペイン皮を思ってぞっとしました。それがわたしの好みだったのですもの。二、三週後に、ラスキンがわたしたちに自分の著作を送ってよこしましたが、どれもみな濃青色の子牛皮の装幀でした、この老ペテン師め！ それから、グラッドストーン氏 [William E. Gladstone 1809-98 英国のウィッグ＝自由党の政治家. 19世紀後半に四度首相となる] が来ました。彼の娘のヘレンは、わたしのコレッジの学友でした。いや、むしろ正確には、親しい論敵でした。わたしたちはあらゆることで激論を交わし、なんら共通の意見を持ちませんでした。彼女はおよそじつに快活で、騒々しい人物でした。わたしたちは《ボレアス [Boreas ギリシア神話の北風の神]》というあだ名をつけました。なにしろ、ヘレンには友人たちを連れてきては、寮の廊下を所狭しと走りまわる習癖があったからです。彼女はまったくリッテルトン [George Lyttelton 1709-73 英国の政治家・文人. 男爵のことか?] そのもので、自分の敬愛する父親の痕跡ありませんで

した。わたしは当時は頑固な保守党 [Tory] 支持者でしたから、断固として学生の群衆に加わって、この《Grand Old Man [老大人、グラッドストーンのこと]》を拍手喝采して出迎えることを拒否しました。そうして自分の部屋に籠もりました。そこへ——からかい半分に——ヘレンがグラッドストーンを連れて来たのです。彼は腰を下ろすと、わたしに向かって好きなギリシア作家を尋ねました。内心、ホメロス [Homer 前9世紀ころ、ギリシアの伝説的な大詩人、二大叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』] なら無難だという感触があったのですが、わたしはつむじ曲がり、あまり正直ではなかったもので、却ってエウリピデス [前5世紀のギリシアの悲劇詩人、神話の新しい解釈、人間的な写実主義の作風、『アンドロマケ』『タウリケのイピゲネイア』] と答えました。アイスキュロス [Aeschylus 前525-456、ギリシアの悲劇詩人、宗教的で壮大・深刻な作風、『縛られたプロメテウス』『オレスティア三部作』] だったら上出来だったでしょうし、ソフォクレス [Sophocles 前497-405ころ、ギリシアの悲劇詩人、古典悲劇の完成者『オイディプス王』『アンティゴネ』] だったらまずまずだったでしょうに。それにしても、あの懐疑的なエウリピデスとは！ これは、やりすぎでした。そこで、グラッドストーンは二、三の警告の言葉を残して、退散しました。そうして最後に、でも、まったく初めて、ジョージ・エリオット [George Eliot 1819-80、英国の女流作家・評論家、現代の自主的知的な女性の先駆者、心理洞察と田園風俗の描写に特色『サイラス・マーナー』『ミドルマーチ』] がやって来ました。それはエリオット崇拜熱が絶頂にあった頃で——ありがたいことに、わたしは彼女の祭壇を去ったことはありませんが——わたしたちはマクミラン書店の外で『ダニエル・デロンダ』 [Daniel Deronda エリオットの最後の作品、1876] の新しい連載分が発売されるのを待ち受けたものでした。エリオットはわたしの部屋に数分間立ち寄ってくれました。わたしは興奮のあまり気

が遠くなるほどでした。わたしはちょうど自分の部屋の壁紙を沈んだ色のモリス [William Morris 1834-96、英国の詩人、工芸美術家、印刷工房「ケルムスコット・プレス」を中心に「アート・アンド・クラフト (美術・工芸) 運動」を起こした] 風の壁紙の最新もので張り替えたばかりでした。誰かがそのことに彼女の注意をうながしたに違いありません。エリオットは内気な、印象的な調子で、こう言ったのですから。「この壁紙はあなたのお顔の美しい背景になります」その歓喜ときたら天にも昇るようでした。こんなこと後にも先にも最初で最後でした。その後ロンドンで、わたしは、もちろん、なお多くの著名人と出会いましたが、あのような瞬間は二度と訪れませんでした。ブラウニング [Robert Browning 1812-89、英国ヴィクトリア朝の代表的詩人、劇的独白体による心理描写に特色『男と女』『指輪と書物』] は、わたしには愉快的な、面白い、おしゃべり屋にすぎませんでした。ハーバート・スペンサー [Herbert Spencer 1820-1903、英国の哲学者・社会学者、進化論的哲学を樹立『第一原理』『社会学原理』] は一度わたしをディナーに招いてくれました。アテネ料理が話題にのぼりましたが、残念ながらその点では、わたしは知識不足でした。ペイター [Walter H. Pater 1839-94、英国の唯美的批評家・小説家、『ルネサンス』『享楽主義者マリウス』] とその姉妹はみないいい人たちで、自宅をわたしに開放してくれました。さて、ペイターというと、わたしはいつでも、やさしい、親切な猫のことを思い浮かべます。彼は喉を鳴らすように、じつに言葉巧みに話すので、わたしは、相手が言っていることの意味を忘れてしまうほどでした。ペイターの家ではしばしばヘンリー・ジェイムズ [Henry James 1843-1916、米国生まれの小説家で、後に英国に帰化した、心理主義文学の先駆『デージー・ミラー』『ある婦人の肖像』『大使たち』] に会いました。あの精妙な蜘蛛がその巣を張る様子を眺めるのは好きでしたが、彼はわたしにはまるで魅力がありませんでした。ミス・ボサンケッ

ト [Miss. Bosanquet] の最近の楽しい著作『仕事中のヘンリー・ジェイムズ』は、自分の失ったものをつくづく感じさせてくれました。

テニソンの息子の妻ライオネル・テニソン夫人 [Mrs. Lionel Tennyson]、後のオーガスティン・ビレル夫人 [Mrs. Augustine Birrel] は、わたしの親友の一人でした。彼女の案内で、その名士の家に滞在したことがあります。テニソン [Alfred Tennyson 1809-92 英国ヴィクトリア朝の代表的詩人の一人、桂冠詩人、初代男爵『イン・メモリアム』『国王牧歌』『イノック・アーデン』] はわたしたちを駅に出迎えてくれましたが、「ディナー用正装をするつもりなぞなかったのだが、あなたがいらしたので」とかなんとか猛烈にぶつぶつ言っていました。これにはいささかぎょっとしましたが、こっけいでした。この見栄っぱりな老人（あれほどにあけすけな見栄っぱりはほかに会ったことはありません）は、自分にはゆったりした、詩人のマント姿が一番よく似合うことを十二分に承知していたのです。イヴニング・ドレスによって引き立つのは、珍しい、渋い魅力です。そのかなり強烈な知力に应じて、彼はわたしにたいそう親切でした。わたしを日曜日の記憶すべき、長い散歩に連れ出して、「モード [Maude]」[劇的独白の形式による詩作品の傑作、1855] をはじめ無数の作品を朗唱してくれました。それは気づかわしい喜びでした。しばしば自分の詩文の一部を忘れてしまい、わたしがその語句を補ってあげなければ、明らかに当惑したからです。テニソンは突然立ち止まって、怒りを含んで尋ねました。「きみはブラウニングにあの一行を書くことができたと思うかね？ スウィンバーンにできたと思うかね？」わたしは心の底から答えることができました。「不可能ですわ」かりにテニソンにかなりの気取りがあったとしても、それはほとんど彼の咎ではありません。なにしろ、その家には英雄崇拜の雰囲気が充満していたので、自由な呼吸はむづかしかったから。テニソンは今でもわたしには偉大な詩人です。わたしはテニソンと知り

合いだったことを誇りに思います。若い反動家たちが、テニソンはまったく詩人じゃないなどと言うのを聞くと、ただただ愚かしいかぎりだと思います。テニソンは極度に英国的でした。それゆえに、意識的な思想家としては最高の出来栄ではありません。それでも彼は十二分に感じたし、言葉の技倆は見事なものです。英語があるかぎり、「In Memoriam」「蓮食い人 [The Lotus Eaters]」「ユリシーズ [Ulysses]」「砂州を越えて [Crossing the Bar]」のような詩歌は生き残るに相違ありません。非常に偉大な芸術家でも、英国では誰にも知られぬ人々がいました。ところが、わたしは当時認められようと奮闘していた若手の印象派の連中から、多くのことを学びました。バーン・ジョーンズ [Edward C. Burn-Jones 1833-98 《ラファエロ前派》の画家、中世趣味と幻想的雰囲気を特色とし、モリス・ラスキンとも親交あり] もわたしに親切でした。よくわたしの所に来ては、わたしと座ったまま、熱心なうれしそうな手つきで、ギリシアの壺の素描をひっくり返していました。時には、彼が奇妙な空想を描いている間、わたしは一緒に座っていることもありました。それに、静かな、装飾的な猫が、よくその肩に座っていました。風変わりなイラスト入りの手紙をたくさん書いてよこしました。それらをすっかり破ってしまったのが、今となっては残念です。わたしがもっとも憧れていた人たち、クリスティナ・ロセッティ [Christina G. Rossetti 1830-94 英国の女流抒情詩人、画家・詩人のダンテ・G・ロセッティの妹、妖精の市場] とスウィンバーン [Algernon C. Swinburne 1837-1909 英国の詩人・批評家、官能的・ロマン的特色『アタランタ』『詩と民謡』] は、外で食事をするタイプではなかったもので、かれらとは知り合いになりませんでした。わたしに一番影響を与えた男女の方々——わたしの真の友人たちは、まだ存命しています。かれらのことは書かないかもしれません。

一人、親愛な、亡くなった女性の方がいます——ミス・サッカレイ [Miss. Ann Thackeray

1837-1919 英国の小説家、『虚栄の市』の小説家サッカレイの娘』です。この人は後に、コレッジの学友の兄リッチモンド・リッチイ[Ritchie]と結婚しました。わたしは彼女にイートン校[英国の名門パブリックスクールの一つ、貴族・金持・名士の子弟が多い私立男子校]で初めて会いました。彼女はどうかしらわたしに気に入ってくれたようです。というのは、彼女はチズウィック[Chiswick]へ遊びに来るよう招いてくれたからです。午後の五時ではいかがということでしたので、わたしは五時に現われました。彼女は両腕を広げてわたしを迎え、列車用に本を入れておいた小さな黒のサテンのバッグにいそいそと手を伸ばしました。「あなたの手荷物はスーザンに二階に運ばせて。さあ、ティーをとるのよ」わたしはその「手荷物」なるものを抱えたまま、その晩泊まるようにという話は彼女から聞いていないと説明しました。「まあ、でも、あなたには長い、長い間居てもらいたいの」なぜ、ああ、なぜ長く居なかったのでしょうか？ デイナーの先約を破るのを尻込みしたためでしょうか？ それとも小間使のスーザンにわたしの「小荷物」を開けられて、クリスティナ・ロセッティの詩集一冊では夜具には不十分と思われるという上品ぶった恐れのためでしょうか？ それこそ又とない機会を失ってしまったわけです。わたしはその後すぐに、ケンジントン・スクウェアを横切っていて、彼女に会いました。彼女は握手しましたが。興奮して、忙しない[affairée]ようでした。「ゆっくりしてられないの。お友達が——とっても、とっても親しい方たちがね——ディナーに来るの。で、卵を買って行くって約束したのよ」そういうなり、彼女は大通り[High Street]へと姿を消しました。彼女はその華奢な足をしっかり地面に触れたことがなかったのではないかしら。『パンチ』誌に載った彼女の小説のすてきなパロディーを取って置かなかったのは、かえすがえすも残念でしたよ。それはこんな結末なんです。「親切な手が私を助けようと差し伸べられた。二つの親切な手。私

はどちらを取ったのか分からなかった」

ウォルター・ローリー[Sir. Walter Alexander Raleigh 1861-1922 英国の批評家・文学者、グラスゴー大学教授、1904以後オックスフォード大学教授、『ミルトン』『シェイクスピア』]は早いころの友人でした。彼とその感じのよいお母様と姉妹の方々。こんなことがありましたよ。ある晩ディナー後、わたしたちはみんなで暖炉を囲んで座っていました。ウォルターが自作の詩をいくつか読んでいます。《夜》が迫ってくる詩があって、これはその一節。

かくて、神は星の如[ごと]きらめく彼の
《熊》をひき巡らす。

And God leads round His starry Bear.

「なんて素晴らしいんでしょう！」わたしは他愛もなくつぶやきました(友人たちに言わせれば、とかく熊の話になると、わたしは涙もろくなるそうなのですが)。「ウォルター」と彼の母親が厳しい口調で言いました。「よくもまあ、あなたそんな大袈裟な！ 神様は熊なぞひき巡らしませんよ」「あのね、母さん」とウォルター。「それはあなたのせいですよ。わたしたちは子供のころ、いつでもこう聞かされていたものでしょう、神様は星の群をそれぞれの道に導いたとね。ですから」そこで、わたしの方を見やって「わたしは母親の膝の上でそれを学んだのです」「きっと、あなたのお父様にはその詩は気に入らなかったと思いますよ」と母親が続けます。かれの孝行心へのこの訴えに、ウォルターはもちろん降参してしまいました。が、後でこっそりわたしに打ち明けたところでは、父親が《熊》の詩の一節を気に入っていたことはたしかで、自分はそれを抑えなければならないということでした。[父親の]ローリー博士は《組合教会派[Congregationalist minister. 個々の教会が独立自治を行う組織の支持者。《独立教会派》とも]》に対して非常に広い視野をもっていたように思えます。[母親の]ローリー夫人は、気持が突然さっと動くことから、いつで

もその家庭では《狐夫人 [Mrs. Fox]》と呼ばれていました。英国政府が一種の称号授与流行症に襲われて、紳士や学者のことをロンドン市長や悪徳暴利業者ととり違えたとき、ウォルターはもちろんナイト爵位〔一代限りのSirの称号〕を授かりました。わたしの友人でもって、あれほど待遇を間違えられた者もまずいません。彼の家族は面白がって、むしろうんざりしていましたが、ウォルター自身はただもう嬉しくて、その称号を玩具みたいにもてあそんでいました。洗練された淑女〔レディー〕の面々が彼を持ち上げて、かわいがりだしました。そこで、彼の姉妹はウォルターを《公爵夫人の愛しい人 [ダーリング]》と名付けましたが、彼はまったく純粹にそのあだ名が気に入っていました。まれに見る美人の娘たちの家族にあって、彼は唯一の器量の上がらぬ息子でした。その姉妹たちは、誰かが言ったように「美しい主旋律〔テーマ〕の」あらゆる「変奏曲」とでもいう風情がありました。ところがウォルターときたら、若者としては無骨なほど不器量でしたが、一生を通じて、なにか目に見えぬ内奥の魂が働いていて、その顔を見ごとに彫り上げ、そこで死ぬ前には美しくなっていました。ウォルターは比類のない話の名手で、まさに靈感に満ちた講演者でした。彼が執拗に保持した見解は反動的なものでしたが、わたしの考えでは馬鹿げたものでした。わたしたちは始終論争を交わしました。ああ、ウォルターはみずからの命で、そのとてつもない空想的な戦闘精神を償ったのです。

当時、わたしはヴィクトリア時代の一階級のさまざまな標本に会いました。それは必ずしも著名でないにせよ、少なくとも独自の人々でしたが、現在では、どうやらほとんど死に絶えてしまったようです——つまり、英国の男女の流行族 [Lions and Lionesses. Lionには「獅子」とともに「名士・花形」の意味がある] です。まず、女性の流行族《牝ライオン [Lioness] たち》から——これはわたしたちがニューナム

で彼女らにつけた名前です。彼女たちはいずれも独身で、生まれがよく、立派な教育を受け、裕福でした。そして、ギリシア芸術についてのわたしの講義に出席しました。ギリシア芸術はそのころブームで、はなはだお上品な [Respectable] ものとされていたのです。家庭では彼女らはさかんに園芸をしました。その大半は田舎に屋敷を所有していました。わたしにとって彼女らの庭園は脅威的でした。なにしろ、わたしときたら標示板の添えてある植物の名前さえ思い出せないのに、植物の名前を間違えたりすることは、《牝ライオンたち》にとっては数をごまかすのと同様に悪いことだったのですもの。彼女らは日記をもっていて、それに毎日の天候状態を正確に記入していました。ロンドンで生活する場合には、彼女たちは《Friendly Girls [友情ある少女たち]》と《Workhouse Nursing [貧窮院看護]》に賛同しました。なかでも、彼女たちは地方公務員の欠点には注意の目を怠りません。しばしば『タイムズ』に投書しました。彼女たちの手紙は「泥とぬかるみを再び」という見出しが掲げてありました。春と初夏に、彼女らはイタリアに出かけました。たいてい《若い親戚》を伴っており、その費用は彼女ら持ちでした。主としてローマとフィレンツェまでの船旅でしたが、さらに大胆な女性にはアッシジまで足を伸ばしたものです。マッシュルーム・ハットに、ヴェイル、ちりよけのマントという装いで、たくさんのスケッチを描きました。そうしたスケッチの主題はいつでもそれと見分けがつかしました——荒廃した塔と教会の柱廊です。彼女らにはふつうの男は取るに足りぬ存在でしたが、自分の男性の親戚たちのことは敬意をこめて話し、「学部長 [ディーン] であるわたしの伯父さん」や「大執事である [アーチディーコン] わたしの従兄弟」の意見をひんばんに引用しました。彼女たちは優れた、立派な血統でした。彼女らのことが懐かしいですね。彼女たちは満たされぬ願望なぞついぞ抱かなかったし、「抑圧されたコンプレックス」なぞ聞いたこともなく、楽し

そうに、活気に満ちみちた、どこかきこちないにしろ、人生を送っていました。

彼女らに対応する男性たちが《英国の牡ライオン》[British Lion] たちでした。かれらについては、当然ながら、わたしはさほど知りませんでした。両性間の真の親密な関係は、当時であって普通ではありませんでしたが、わたしは遠方から大喜びで彼らを眺めていました。いつでもかれらが適切に大笑いするのを当てにすることができました。しばらくの間わたしは《女学生通学学校協会委員会》で働きましたが、ここは主として《英国の牡ライオンたち》によって経営されていました。で、わたしはかれらに同行して、地方の表彰式[年二回優秀生徒の表彰が行われた]で司会をする特権を与えられました。かれらは講演をし、わたしは大きな、いかにも重い花束を抱えていました。こうした講演の意見は、決まり切った方針に沿ったものでした。そうして、最後は必ずお決まりの文句で締めくくられるのです。

完璧な女性、気高い志を抱き、
戒めを与え、心を慰め、命令する女性。
A perfect woman, nobly planned
To warn, to comfort, and command.

わたしは一時、そうした誘惑に抵抗するような《牡ライオン》に対して、ささやかながら半クラウン銀貨の賞金を贈呈しようと思いました。少し後に、わたしは《古典協会委員会》で働きしました。そこなら、間違いなく五シリングまでその賞金を引き上げられそうでした。しかるに「現在の自分のあるのは、ひとえにラテン語散文の書取りのおかげです」と言わずに、自分の演説を終えた《牡ライオン》は一人としていなかったのですよ！ わたしがかつて《英国の牡ライオン》と二人でヨットに乗ったなどと口にしたら、はたして無分別でしょうか？ 彼はやや年をとって、甲板船室を持っていました。わたしは通りすがりにたまたまのぞいてみました。テーブルには聖書が一冊置いてあ

り、聖書の上には歯ブラシが見えました。清潔が「信心深さの隣に」あったわけです。おお、イングランド——わがイングランドよ！

わたしがギリシアの芸術について講義を始めたのは、その頃のことでした。ウィルソン大執事[アーチディーコン]が初めてわたしをクリフトン[Clifton][英国のブリストルにあるパブリックスクール]に招いてくれたのです。彼から後ほど聞いたところでは、その講師が女性であることは、一切が済むまで評議会には敢えて告げなかったそうです。後になって、わたしの聴衆には他ならぬマクタガート[Joseph Ellis MacTaggart 1866-1925 英国の哲学者、『ヘーゲル弁証法研究』]とロジャー・フライ[Roger Fry 1866-1934 画家・美術評論家]が含まれていたこと、しかも、かれらはその講義についての討論に参加して下さるつもりであったことを、わたしは知りました。それから、いつでも一番親切な友人だったウォレ・コーニッシュ氏[Mr. Warre Cornish]が、わたしをイートン校に招いてくれました。講義に取り柄があったとは思えませんが、男子生徒たちは面白がってくれました。先生の一人が非常に若いウィンチェスター校の「学友[生徒]」にその講義が気に入ったかどうか尋ねたところ、相手は率直にこう答えました。「講義ではなくて、あの婦人が気に入りました。なにしろ、きれいな緑の甲虫みたいだったから」当時のイヴニング・ガウンは飾り物で覆われていて、青緑色のサテンが幻灯の光を捕らえたのです。イートン校で、わたしはある貴族の称号を持った若い気取り屋に紹介されました。翌日、彼は恩着せがましい礼状をわたしによこしました。その中で自分は《己れに鍛練を課する》ためにオックスフォードまで進むつもりなので、考古学[古代学]を続けたいと書いてきたのです。ああ！ 結局のところ、彼はそんな有益なことをちっともしなかった。わたしの一番下の弟がハロウ校[イートン、ウィンチェスター校などとならぶ名門のパブリック・スクール]にいました。そして、わたしがイート

ンで講義をしていると聞いたと書いてよこしました。そんな暗愚なところで姉さんがなにをしようが、世間からどう思われても構わないけれど、自分は「姉さんがハロウに講義をしに来ないように希望します。そんなことになったら、ぼくは他の仲間の連中に対してとてもきまりが悪くてならないから」わたしは彼の立場を理解して、それを尊重することにしました。

それから、現実のケンブリッジの学術グループということになります——これは振り返ってみると、華々しいグループだったように思えます。ケンブリッジ社会はそのころは小さくて、一つだけで充分でしたが、小さいけれど、非公式でないディナー・パーティーが無数にありました。大学の序列の秩序は常に厳格に守られていました。ヘンリー・シジウィック [Henry Sidgwick 1838-1900] がその中心で、彼とともに二人のごく親密な友人フレデリック・マイヤーズ [Frederick Myers] とエドマンド・ガーニー [Edmund Gurney] がいました。中でもフレデリック・マイヤーズが、おそらく、一番朗々と響き渡るような存在でしたが、わたしにはいつも少々偽物めいて聞こえました。またエドマンド・ガーニーほど愛すべき、上品な人は見たことがないように思います。これは心靈研究グループでした。かれらの探求しているのは、靈魂不滅の科学的証明でした。そんな風に言うと、今ではほとんどグロテスクに聞こえますが、当時それは人を奮い立たせたものです。これを中核として、その周囲にもっと広い世界から、バルフォアズ [Artur James Balfour 1848-1930]、ジェップ [Richard Claverhouse Jebb 1841-1905] といった人々が居並んでいました。そして、後には若手の世代が台頭しました——ダーウィンの三人の息子、Verrall夫妻（二人ともわたしの親友でした）などです。ペンブローク [Pembroke] のロバート・ネイル [Robert Neil]（その同情あるスコットランド風の沈黙は、ごく陰気な集まりにも火を点けて輝かせました）。ジョージ・プロセロス [George

Protheros]、フレデリック・メイトランド [Frederic Maitland]（その娘のフレデゴンド・ショウヴ [Fredegond Shove] は当代の叙情詩的な歌手の中でも一番美声です）。そして、彼らの中にあって、ヘンリー・シジウィック夫人 [Mrs. Henry Sidgwick]（若いころのミス・バルフォア [Miss. Balfour]）は星のように輝いていました。彼女は夫や兄のような社交的才能は少しもなかったものの、どんな会合でも、一種の柔らかな光に輝いていました。わたしたちが彼女をわたしたち [ニューナム] の学寮長 [Principal] に据えたために、科学はすばらしい研究者を失ったのではないかと危惧しています。それでも、彼女は会計財務に対して申し分のない熱意を示しました。「なぜわたしはディナーのために盛装する必要があるの？」と、会計簿に優しく触りながら、彼女はわたしに憂鬱そうに言いました。「わたしはこの仕事を続けなければならないというのに？」彼女は几帳面なほど誠実でした。ある時、商店や会社が作り出す奇妙な用語について、わたしたちは講堂 [ホール] で話し合っていました——《haerdashry》とか《hosiery》といった類の、外部の世界の人々には分からない言葉です。わたしは《ここアルバート記念碑にalight [たまたまぶちあたる]》という表現を引用しました。いったい誰が「alight」などという者がありますか？「わたしはいつも《alight》といいますよ」とシジウィック夫人が言いました。「とてもいい言葉です」そこで、わたしが応じました。「ごめんなさい。きっとあなたはそういわないと確信していたもので」数分後、廊下で彼女と一緒にいました。彼女は言いました。「あなたのおっしゃるとおりです。わたし《alight》とは言わないわね。でも」と、そこで注意深く「これからはいつでもそう言うと思うわ」どうぞ、彼女がそう言いますように！ また別の折、わたしは教育における古典の、この上ない重要について述べ立てていました。彼女は言いました。「でもね、あなたはご自分の科目の重要性和、そこからあなたが引き出すとてつもない喜びと

を、混同なさっているのではないかしら？」まさしくその通りでした。その並外れた誠実さのために、彼女は天真爛漫でした。最後まで目隠しをつけたまま、低俗で、邪悪な世界のさなかを歩いていたのです。その身なりと生活態度は簡素の極みであって、そのためわたしなぞ俗物だと感じ入りましたが、それでも、わたしはどんなに彼女を好きだったことか！どんなに彼女はわたしを笑わせてくれたことか！わたしは一度もそんな自分の愛情の念を口にしませんでした。ところが、ああ！コレッジの方針にかけては、わたしはほとんど常に彼女に反対せざるをえませんでした。この『ザ・ネイション』誌の評判に隠れて、今わたしはそれを言います。わたしたちの大好きな人々が、わたしたちを嬉しく陽気な気持ちにさせるのは、どういうわけなのでしょう？ある人を笑いはじめるや、わたしらはかれらを少し愛しはじめるのです。

友人の中では唯一の科学者であるフランシス・ダーウィン〔植物学者のSir Francis Darwin 1848-1925《進化論》で有名なチャールズ・ダーウィンの子。著書に『ダーウィン伝』〕はわたしに根強い影響を与えました。古典に対しては懐疑的に見ていたものの、彼はわたしには親切でした。ある日、フランシスはわたしが《Mystica vannus Iacci》〔イアッコス（バッコス）の神秘の箕：ヴェルギリウス『農耕詩』1-166〕に関する論文をあせて書いているのを知りました。「それを今夜中に仕上げねばなりません」とわたしが汲々として語りました。すると「vannusとは何のことですか？」と彼は尋ねました。「あら、箕のことですわ。通過儀礼で使われた神秘的なものです」「なるほど、しかし、ヴェルギリウスはそれは農具だと言っていますよ。君は実物を見たことがあるのですか」「いいえ」とわたしは白状しました。「それなのに、君はまだ見たこともない物について書こうとしているのですね」わたしの友人はうめくように言いました。「ああ、君たち古典学者の連中ときたら！」けれども、これで終

わりではありませんでした。彼はいろんな農民に尋ねてみました。が、無駄でした。外国の農場にまで問い合わせの手紙を出してくれました。そこでやっと、フランスの片いなかで使用されている神秘的な《箕》を発見して、それをケンブリッジまで送らせました。幸運なことに、フランシスの老人庭師がその旧式の道具を使えるイングランドでおそらく最後の人物であることが分かりました。彼の家の庭で、その《箕》で穀物を吹き分ける実演が行われることになり、博学の学者たちが集まって、試行錯誤が繰り返されました。その奇怪な形そのものが、神秘的な、またその他のあらゆる用途を説明していました。三ヶ月後『Hellenic Journal [ギリシア紀要]』に、わたしは「自分の目で見えて、実際に理解した」事柄についての一文を送ったのです。この一件はわたしにとって生涯にわたる教訓となりました。これは必ずしもすべてわたしの落度ではありませんでした。わたしは、言葉を解釈することが、それを理解することよりもずっと大切だと考えるような学校で教えられてきたのです。わたしは学生の頃その《vannus》はなぜ神秘的なのか、熱心に質問しました。が、返ってきたのは「あなたはその文章を正しく解釈しました。さしあたりそれで結構です」という答えでした。そして、わたしの《教師 [コーチ]》はヴェルギリウスの本を閉じると、悲しげに言いました。「今日は仮定法は出来が悪かったですね」そうした訓練が、わたしの始終浮わついた精神にとっておそらくおよそ最適なものだったのです。

何年も後のことになりますが、著名人でもって、このわたくしがニューナムでもてなすのをお手伝いした最後の方は、日本の皇太子〔裕仁親王、後の昭和天皇。当時東宮兼摂政。1921年の訪欧の途次、5月18日ケンブリッジ大学に行啓、ニューナム・コレッジを視察している〕でした。自分の孫ほども若い男性に、お辞儀しなければならぬとしても、その方が自分を神様だと信じているのを知れば、少なくともいくらか慰めにはなります。それはわたしの興味を惹い

た一件でした。わたしはその皇太子に奇妙な魅力を見いだしました。彼は落ち着きがあり、一種のもの静かさと安心感を漂わせて、ほとんど神々しいように思われました。日本語は硬母音の《i》を有する数少ない言葉の一つです。ロシア語を除いて、インド＝ヨーロッパ語族はいずれもそれを失ってしまいました。もっとも、あるロシア人の話では、《Piccadilly》と発音する《ロンドン子 [コックニー]》の新聞売りの少年の唇から、その硬母音の正確な発音を聞いたそうです。皇太子はみずからのお名前を親切にも、二、三度わたしに告げてくれましたが、とても残念なことに、忘れてしまいました。

わたしの身の上は王室とはなんの縁もありませんでした。ただ一人だけ、王家の女性フレデリック皇后 [Empress Frederick ヴィクトリア女王の娘ヴィクトリア王女、ドイツ皇帝フリードリッヒ三世の王妃] からはたいそう優しくしていただきました。それで、わたしはそこそ親切を誇らしく思い出します。皇后陛下はわたしのものに使いを寄越して、ドイツによるギリシアの劇場の発掘についてあれこれお尋ねになり、ギリシア演劇に関してドルプフェルト [Wilhelm Dörpfeld 1853-1940 ドイツの古典考古学者・建築家、アテネのドイツ考古学研究所の所員として、シュリーマンのトロイ・ティイリスの発掘に寄与した。『ギリシアの劇場』1896。『古代オリムピア』1935] の提唱した新学説を説明するようお求めになりました。およそ見たことがないほどに悲しげなお顔でしたが、彼女は本物の立派な知識欲をお持ちでした。わたしは確信していますが、もし運命によって翼を折られず、王宮に閉じ込められなかったなら、高く飛翔したことでしょう。わたしたちが熱心にお話をしている最中に、侍従 [サーヴァント] が入って来て、皇太子 [Prince of Wales] (後のエドワード国王 [Albert Edward 1841-1910 ヴィクトリア女王の長男エドワード七世 (1901-10)、日英同盟、英仏協商を成立させ、南ア戦争を終結、ドイツ包囲政策を採用]) がお会いになりたいと伝えました。

王室の礼儀作法 [エチケット] にはまるで不慣れなものでしたので、わたしは相手を解放しようと自分から立ち上がるという《しくじり》を犯してしまいました。皇后は侍従に向かって「だめ、だめ」と言うのと、こちらに振り返って「さあ、そのまま続けて。わたしは知りたいのです」そこで、未来の国王陛下はたっぴり長い間待たされたのです。わたしは何度もお会いして、いつしか皇后に愛情を抱くようになりました。けれど、安らかにお亡くなりになったと聞いて、とてもほっとしました。亡くなられて (もっとも当時わたしは知らされなかったのですが)、今度の戦争 [欧州大戦 1914-18 いわゆる第一次世界大戦、英国とドイツは主要な敵対国となった] のことで苦悩なされずに済んだのですもの。皇后は、わたしが今度ギリシアに出かけたら、自分の娘である皇太子妃 [ゾフィー、後のギリシア国王コンスタンティノス一世の妃] に、ぜひ会いに行くように言われました。もちろん、わたしは行くことになりましたが、行って残念に思っています。彼女の娘の方は、優れたお母さまとは異なって、ごくありふれた人だったのです。皇太子妃はひどい寄宿学校なまりがあり、スラングを使いました。彼女はほんとうはギリシアの事柄には関心がなかったのですが、「すごくすてきな発掘をした、わがワルトシュタイン」について大声で話されました。わたしは彼女にうんざりしましたが、逆に、彼女もわたしにうんざりしました。人は誰でもいくらか王室の方に会うべきです。侍従のように振る舞わなければならぬことは、とても卑屈であり、最初はいらいらしますが、それでもって侍従たちが本当にどんな思いをしなければならぬかを理解するからです。

インタビューアーというのは——最初の興奮した重要な瞬間を過ぎると——興味ある連中ではありませんが、その一人の思い出はかぐわしい香りとともに立ち返ってきます。それは合衆国中西部 [Middle West] 出身のアメリカ女性でした。カールした白髪、クウェーカー風ボン

ネット姿の初老の婦人でしたが、誇張癖のある心情の持主でした。彼女はわたしのもとに一通の紹介状をよこして、ブルームズベリーにある彼女の下宿を訪れてくれないかと頼んで来ました。わたしは朝の十一時にそこを出かけると、彼女は優雅なティー・トレイで接待してくれました。それはきつと手ずから並べたものに違いありません。ブルームズベリーの下宿のおかみには無理ですから。あなたがた英国の婦人方は十一時にお茶を飲むのが好きだと聞いたもので、と彼女は言いました。きつとそれを使用人部屋で聞いたに違いありません。それから、インタビューが始まりました。あなたはギリシアの壺にかけてはたいへんな権威であると聞いたのですが、「現代教育でギリシアの壺の占める位置」について、お考えを話してもらえないでしょうか。わたしは口ごもりつつも、陳腐なことをいくらか話し出しました。いきなり相手がわたしをさえぎって「失礼ですが、ミス・ハリソン、あなたはとっても貴重なことをその口から漏らしています。今すぐに筆記用具をもって来ますから」それから、それからとうとう、あの誇張癖が出たのです。彼女はじつは《学校の教師》でした。お金をためてヨーロッパにやってきました。でも、それはヨーロッパ見物をするためでなくて——ギリシア芸術について本を書くためだったのです！ ギリシアとギリシア芸術に関して、彼女はなにも知りませんでした。が、ペンを片手にヨーロッパの博物館をまわって歩き、そうして、それからああ嬉しいことに！ わたしに手紙を書いてよこしたというわけです。なんとも、その勇敢にして、無邪気なこと。その奇妙な成り立ちの著書が日の目をみたかどうか、わたしはそれは知りません。あるいは彼女が《幸福の島》に到着する前に、死神に捕まったかもしれませんが、それにしても、彼女はオデュッセウスの魂をもっていました。別れる前に、彼女に尋ねられました。「アンドルー・ラング氏 [Mr. Andrew Lang 1844-1812 スコットランド生まれの英国の民俗学者・文学者。ホメロスの翻訳で著名]

とは、お知り合いですか？」彼女は彼への手紙を持っていました。「ところが」と彼女は悲しそうに言いました。「ミス・ハリソン、どうもアンドルー・ラング氏は熱心な真理の追求者ではないような胸騒ぎがするのです」

さて、それでもって《まだら髪のアンドルー》と、あるディナーパーティーで、最初に会ったことを思い出しました。その女主人が彼をわたしの許まで連れて来て、的外れにも、精一杯愛想よくしようとして、こう言いました。「こちらがミス・ハリソンさんです。きつと、この方の楽しいご本は何かご覧になってるでしょう」「いや、ミス・ハリソンさんという方は知りませんな」とアンドルーはもぐもぐつぶやきました。「この方の楽しい本はどれも読んだことがないし、読みたいありませんな」などなど。(ああ、アンドルーったら、あなたはわたしの《楽しい本》を、あまり嬉しくもなさそうに、書評してくれたたくせに！)「さあ、ラングさん」とわたしは応じました。「わたしら二人ともおながすいてますでしょう。ですから、一言もあなたにお話ししないと約束いたしますわ。男らしくなさい」ああ！ わたしはその約束を破ってしまいました。あれは魅惑的なディナーでした。

三 章

《ギリシアとロシア》

わたくしは、ロンドン生活を通じてずっと(十五年間)、ロンドンと地方とで講師をしていました。十二人家族の一人なので、わたしの財産は乏しく、しかもパーティーの人づき合いはお金がかかります。今となっては、それら講義をして暮らしていた年月を後悔しています。わたしは口達者で、たちまち成功しましたが、逆に、それは精神的には堕落させ、心身を疲れさせました。わたしはほとんど生まれつき流暢な話し手だったものの、大聴衆を前にすると、決まって現在のいわゆる胃ケイレンの状態に陥ったものです。おまけに、わたしは芸術について

講義をしていました、そのテーマを論じる生来の才能もなかったのに。芸術に対するわたしの反応は、どうやら、いつでも間接的なものだったように思います。そこで、芸術に関しては、わたしは他人〔ひと〕の説得を受け入れ、柔順でした。文学に関してなら、自分自身のセンスについて絶対的に確信を抱いているし、英国の主教たちが全員でかかってこようと、わたしの信念を変えることはできないでしょう。ところが、幸運にも、少しずつ芸術と考古学とがわたしを神話へと導いてくれました。そして、神話は宗教へと変わって行き、そこでやっと、わたしは安住の場所を見いだしたのです。ロンドン生活時代を通じて、わたしはとても熱心に勉強しました。——いや、違います！ ギルバート・マレー [Gilbert Murray 1866-1957 英国の古典学者、オックスフォード大学教授、ギリシア悲劇の翻訳、『ギリシア宗教発展の五段階』] 教授がかつてわたしに向かって、一生涯あなたはほんとうに熱心に勉強したことは一時間もないと言ったことを思い起こします。どうやら、彼はわたしがロシア語の格変化を学んだのを忘れているようですね。さすがの教授にもそんな経験はありません。けれども、教授の言うことは正しいと思います。彼はたいてい正しいのです。自分の性分に反したテーマに必死にとりかかるという意味では、わたしは決して勉強したりしません。天国はわたしから「いかなる暴力も許さない」のです。ロシア語の「学ぶ」という動詞 [ウチツァ] は、与格の目的語をとりますが、これは奇異に感じられますが、その動詞が「何々に慣れる」という動詞と同一語源から出ていることを知ると、ようやく納得します。学ぶというのは、ある事柄に「みずからを慣れさせる」ことなのです。これは教育学の論文にまるまる匹敵することです。しかも、それはわたしに自分のこれまで辿った経過を説明してくれました。人はまずある主題〔テーマ〕を取り出します。それから、そのうちに自分自身をひたします。それで、個人的責任は終わります。何かが動きだし、発酵して、人の意識の中

にふっと浮かんで来ます。そこで、本を書かなければならないと初めて知るのです。それはたしかに「猛勉強」ではないかもしれませんが、マレー教授には、わたしからこう言わせてほしいと思います。それは結果として苦しいと同時に楽しいものです。仕事の後には、消耗し、疲れきって、ぼろぼろの、それでも昂揚した状態になります。

わたしのロンドン生活は、度重なる海外旅行によって幸運にもうち切られました。わたしの考古学の知識はすべてドイツ人たちから与えられたものです。かの名声赫赫たる、偉大なエルンスト・クルティウス [Ernst Curtius 1814-96 ドイツの学者、『ギリシア史』1857-61. 一時ベルリンの博物館長だった] がわたしをベルリンの博物館を案内してまわってくれました。ハインリッヒ・ブルン [Heinrich von Brunn 1822-94 ドイツの学者、『ギリシア芸術家の歴史』1853-59. 美術考古学の建設者の一人] はミュンヘンのわたしの下宿を訪れてくれました。当時は一日四マルクのきりつめた生活を送っていたものです。彼の最初の訪問の様子を覚えていますよ——ドアのノックの音、廊下に浮かび上がるとてつもなく大柄な姿、髭のある、優しい、眼鏡をかけた顔。そして、こんな風に自己紹介をしました。「わたしブルンです」ドルプフェルトはわたしの最大の恩師です。——わたしたちはいつでも《Avtos》と呼んでいました。その後、ドルプフェルトはわたしを《ペロポネソス旅行》と《多島海 [インゼル] 旅行》へ同行するのを許してくれました。それらの旅行はまさに素晴らしい企画でしたが、彼みずからが奇跡そのものでした。その六時間の巡回講義の間、わたしたちはずっと魅了され続けました。途中わずか十分の休憩時間がはさまるだけで、その間にわたしたちは山羊肉のサンドイッチと《いくばくかの新鮮なビール》に与かるのです。わたしは一度、残念なことに、三人の英国人が「新鮮なビール」の後に落伍するのを見かけたことがあります。かれらはいずれも

「オックスフォード出」であって、——（当時の）オリエル〔コレッジ〕学寮長、ブラゼノーズ〔コレッジ〕学長、それにバリオル〔コレッジの〕著名な特別研究員〔フェロウ〕でした。四十人のドイツ人教授連が四十匹の反抗的な騾馬に乗ろうと骨折っているのは、見るだけでもなかなか大変なことでした。わたし自身の騎乗者としての腕は、すでにほのめかしておいたように、まったく「取り立てていう」ほどでなかったのですが、これらのドイツ人教授と比べたら、はるかにましで、ケンタウロスみたいなものです。最後の月に、嬉しいことに、エルンスト・クルティウスの孫にあたる、ロバート・エルンスト・クルティウス教授に会ったことも、なつかしく思い出されます。

当時のギリシアでは、あれこれと物珍しい経験がつきものでした。そんな事件の一つをふり返ると、わたしの行儀の悪さに今でもまったく恥ずかしさを覚えてなりません。わたしがヴルカノ〔Vurcano〕に着いたのは、ちょうど僧院の門が閉まるころでしたが、あちらの好意で入れてもらえました。《Hegoumenos〔ヘグメノス「ギリシア正教の導師」】》がわたしを夕食に案内してくれました。わたしはその隣席を与えられ、かれの皿から食事をいただきました。ギリシアの聖職者たちは、結婚しないような僧侶でさえ、女性に対してごく気さくで、親切です。ローマ・カトリック風の態度の後では、自分が一個の人間、一人の兄弟としてたといか弱き存在〔weaker one〕としてであれ認められ、誘惑の化身として意地悪い目で眺められないのは、すがすがしいものです。ティノス〔Tinos〕でこんなことがありましたよ。わたしは奇跡のイコン〔聖画像〕の行列を見守っていました。イコンを奉持している僧侶が、このわたしが群衆の中でもがいている唯一の西欧の女性であるのを見て取って、若い僧侶に命じて、彼の傍らを歩くように呼んでくれたのです。そこで、わたしは行列の進行の一部始終を、礼拝の儀礼、イコンの接吻、僧侶たちのすばらしい祭服、魂の救済の儀式を無事に見届け

ることができました。さて、導師〔ヘグメノス〕に戻って。夕食後、彼はわたしに一つ質問があるといいました。なんでも、裕福な英国人は口の中に黄金でできた《よそのの歯》（あるいは《お客歯》）を持っていて、それは動くと聞いている。が、それはほんとうでしょうか？　そうです。ひょっとしてあなたは、その《見知らぬ人の歯》をお持ちかな？　ええ、持っています（たしかにわたしは一つだけ所有していました）。ところが、最善の東洋風〔オリエンタル〕の流儀から、わたしはそれに言及することに反対しました。それはほんの粗末なもので、黄金製でなく、象牙製だったのですもの。それををはたして取り出すことがあるかな？　ええ。いつ？　「おお」と、こちらはそわそわして「朝、それまでごく早くにだけ」短い睡眠の後——ギリシアの修道院では睡眠はめったに長くないのですが——わたしは目を覚ましました。導師はわたしの枕元に腰掛け、数珠をつまぐって祈りを唱えながら、じっと——こちらを見つめています。ああ、どうして、どうして、わたしはあの《よそのの歯》を取り出さなかったのかしら？　そうするだけで簡単に、一人の善良な人を幸せにできたというのに。グライアイ〔Graeae、ギリシア神話のゴルゴンたちの三姉妹のこと。一眼一歯を共有し、ペルセウスにゴルゴンたちのありかを教えたという〕みずからが道を示したではありませんか。でも、わたしは若かったのです。そして、若さとは見栄っぱりで、残酷なものです。彼はごく礼儀正しくて、そのことを無理強いできませんでした。そこで自分から、ゆっくりと、悲しげに引き下がりました。十分後に彼は戻って来ましたが、その顔は怒りでむっとしています。すでに恐ろしい醜聞が修道院にわき起こっていました。その神聖さは犯されたのです。あなたたちは即刻にここを出なければなりません。当座は、そのスキャンダルは、ひとえにわたしに付き添いがいないためだと思いました。いえ、決してそうではありません。ギリシア人にとって、女性が一人で無防備で旅行することが、大の間違いのも

となのです。こんなことがありました。わたし
が友人と一緒に旅行していたときのこと、その
友人が大勢のミデアン〔Midian 北西アラビア
の遊牧民、旧約「出エジプト記」2: 15などより〕
人を相手にして大童の夜を過ごした後に、
涼を取ろうと外へ出て、修道院の中庭に井戸が
あるのを見かけて、あと先の考えもなくそのま
ま、渴望していたシャワーを浴びてしまったの
です。その知らせは野火のごとく信徒一同の間
に広がりました。そこで、その侮辱非礼を清め
るために導師が呼び出されました。わたしは無
慈悲にも自分の親切な保護者を犠牲にすること
にしました。「この《紳士》は若くて、無知な
のです。彼はギリシアの文字も知りません（は
なはだしき誹謗中傷！）。なにしろ、生まれた
のも育てられたのも、キリスト教国英国でな
く、北風の向こうの未知の野蛮国なのです。そ
こでは衣類も乏しく、キリスト教的慎みも知ら
れていません。どうぞ、お願いですから、導師
にはあの若者を容赦し、教え導いていただけま
せんものでしょうか？ 宣教の情熱に燃え立つ
導師は《紳士》を呼びにやると、おし黙ってい
る相手に、その手首の上一インチあたりを指し
て、キリスト教徒が、その魂への危険なしに身
体を洗うことができるのはここまでだと告げま
した。《紳士》が何やら独り言をつぶやいてい
るのが聞こえました。それは「まったくもう、
この靴で導師を踏んづけてやりたいものだ」と
いう意味の言葉でした。わたしは慌てて通訳し
ました、これは「命のあるかぎり、わたしは先
祖の首に誓って、その限界を越えることは決し
てしません」という厳粛な誓いだ。危機は過
ぎ去りました。翌朝出発に際して、わたしたち
は水浴の一件を償おうと、異例の贈物を差し出
しました。が、その義憤の聖人は、しごく立派
なキリスト教徒にして紳士ですから、金品で説
得されるようなわけはありません。告別は冷淡
を極めたものでした。われわれは憂鬱な気分
で立ち去りました。別れるにあたって、わたし
は聖人に自分の写真をさしあげました。相手は処
女マリアのイコンの下にそれを置くと、重々し

い口調で、「そなたは明らかに精神的危機にさ
らされている。マリアがそうした危機からそな
たを守ってくれますように」と言いました。

ずっと後に、わたしはアトス山〔Athos ギリ
シア北東部のカルキディス半島が分かれて、三
つ又になった最東方の小半島の先端で、岬をな
す聖山、東方正教会の修道院群からなる自治共
和国〕を訪れました。もちろん、このわたしは
女性ですから、聖なる岬に足を踏み入れるこ
とは叶いませんでした。早朝、友人たちが意気
揚々と、その岬を訪れるために、出発しまし
た。たしか、ローガン・パーサル・スミス
〔Logan Pearsall Smith〕氏が誇らしげに先頭
に立ったと思います。わたしたち女性陣は、や
るせない思いで、そのまま船上に残されまし
た。聖パウロもどきのおきまりの珍らしい事件
〔新約「使徒行伝」17: 16-18. パウロはアテネ
で異教の偶像が多いのを見て憤慨し、人々と論
じた〕をどっさり経験した後に、夕刻一行は
戻って来ました。そして、一緒にアトス山の僧
侶が数人で、ヨットと女性たちを見に、それに
ロザリオやその他の物を売るためにやって来ま
した。僧侶の一人であるロシア人（わたしがそ
う思ったのは、彼のギリシア語が分からなかつ
たから）がわたしに一枚の便箋紙をくれました。
アトス山で発行されたもので、前面には
《山の母〔Mountain Mother〕》の華やかな色の
絵がついています。彼はまずその絵を示してか
ら、つぎに、それとわたしを交互に指さしま
した。まるでこう言いたいかのようです。そう
とも、われわれはともかく一人の女性をこっそ
り持ち込んだのだ。《偉大な母親〔Great
Mother〕》を、ここ彼女自身のトラキア
〔Thrace バルカン半島東部を占めた古代の地
域。現在はギリシア領、トルコ領に分かれる〕
で見いだすのは、また、女性でなく女神最愛の
独身の僧侶たち、若者たち〔Kouretes〕に崇
拝されているのは素晴らしいことだと。

アテネの英国公使館はいつでも来客をもてな
しました。そこで、当時、そこに住む陽気な若
者たちで、そこは楽しい場所になりました。か

れらの中には、自分たちがアクロポリスまで一度も行ったことがないこと、自分たちが現代ギリシア語を一語しか知らない、それは鉄道の駅を意味する《sithérothromos [シデロデロモス・鉄道]》だということを、さも誇らしく自慢していました。それによって、かれらはすぐにもその土地を脱出することを望んだのです。かれらは、もちろん、わたしのギリシア語ゆえにわたしをひどく怖がっているから、わたしをダンスにも誘わないのだという振りをしていました。互いに悪口を言いあっていました。かれらはいつか、なにかに専心しなければならないということ以外には、この世でなにも恐れてなぞいなかったのです。かれらは『パンチ』誌に出てくる仮病の水兵さながらに、こう言いかけませんでした。「まあ、そうですね。自分はこんな調子なんです。よく食べ、よく寝ますが、ちょっとでも仕事を見ると、もう全身がぶるぶる震えるんです」

アテネで、わたしはサミュエル・バトラー [Samuel Butler 1835-1902 英国の小説家。風刺物語『エレホン』自伝小説『万人の道』] に会いました。わたしらは同じホテルに投宿したのです。わたしが一人で食事をしているのを見ると、彼は親切にもつかつかとやって来て、一緒にいてもいいかと尋ねました。もちろん、こちらは喜んで、楽しい話を期待しました。ところが、なんと、まあ！ あの方はわたしをもっぱら、オデュッセイアが女性によって書かれたという自説の無難なはけ口として望んだだけなのです。そして、正気ならざる喧噪のざわめきに、理性的な会話はすっかり飲み込まれてしまいました。

初めてアテネを訪れたとき、わたしは運よくささやかな考古学上の発見にめぐり会いました。アクロポリス博物館で、当時は物置部屋も同然でしたが、破片の山をひっくり返していたところ、とても幸運にも偶然、部屋の片隅にあるがらくたの中に、熊の小さな石像を見つけました。毛皮に覆われた片手が突き出ていて、わたしの目を捕らえたのです。わたしはすぐに彼

女を——それは見るからに牝熊でした——取り出して、きちんと置き直しました。もともとは、女神アルテミス・ブラウロニア [Artemis Brauronia] の聖域に据えられていたのに違いありません。この聖域内で毎年、《arkteia [アルクテイア]》すなわち「熊の祭」が行われたのです。生まれの良いアテネ人が結婚する場合、相手の少女は必ず「熊の祭」に奉仕した経験をもたねばならない。つまりは、女神アルテミスへの信仰を固めていることが必要とされたのです。アリストパネスの『女の平和 [Lysistrata リュシストラテ]』では、女たちのコロス [合唱隊] は自分たちが国家から受けた給付について、また自分たちが成人になる前に行ったこの神聖な儀礼について歌います。そして「わたしは、ブラウロニアのお祭で、黄色い衣をまとして、熊を勤めました」と言うのです。これら生まれも育ちも良いアテネの少女たちは、生涯を終える日まで常に《偉大なる牝熊》を恭しく思っていたに違いありません。現代のアパッチ族の間にあっても、まともな教育を受けていない、しつけの悪いアメリカ人やヨーロッパ人たちだけが、《熊》のことを話す場合に、《オスティン [Ostin]》という敬称接頭辞を用いないと聞かされるのです。これは《老者》という意味で、ローマの《senator》[セナトル・元老]にあたるものです。

クレタ島には、わたしは何度も繰り返し訪れました。そして、このクレタにわたしは自分のもっとも本格的な二冊の著作『ギリシア研究序説 [Prolegomena]』と『掟の女神テミス [Themis]』の刺戟を負っています。世紀の変わり目のころに、クノッスス宮殿で、ある粘土印章が世間に知られるようになっていました。この印章は紛れもなく、初期クレタの信仰と祭式の小さな手引きでした。わたしはアーサー・エヴァンズ卿 [Sir Arthur J. Evans 1851-1941 英国の考古学者。クレタ島のクノッスス宮殿の発掘調査で名高い] が最初にそれをわたしに見せてくれた瞬間のことを、決して忘れないで

しょう。「あまりに素晴らしくて、とても本当とは信じられない」ように思えました。それは自分自身が形作る山の上に、《山の母》が立っている様子を表わしたものです。その両側にはライオンがつき添い、その前には崇拜者が陶醉した姿で立っています。その傍らには神殿が建っていて、《奉納の角》が数本見えます。また、別の印章がそれらの角の謎を解読しました。ミノタウロス [Minotaur] が王座に座っていますが、このミノタウロスこそ雄牛の仮面をつけた人間の王＝神にはかならないのです。ここには古代の《母親と息子》の祭式がありました。これはオリムピアの神々の崇拜にずっと先行するものでした。ここにはその真の《序説 [プロレゴメナ]》があったわけです。それから、何年か後に、再度クレタを訪れた折に、わたしに『テミス』への刺戟を与えたその続きと出会いました。それがディクタエアン [Diktaeon] のゼウスの神殿で発見された《Hymn of Kouretes [若者たちの賛歌]》です。ここで、わたしたちは《母親と息子》の密儀、《父親崇拜》よりずっと先行する《歳神》の導入を具体化したのです。ギリシア宗教に関するわたしの第三の著作『後説 [Epilegomena]』は主として先の二著の摘要 [レジメ] であり、それらを現代の宗教的な展望にそって述べようという試みです。わたしはここで『プロレゴメナ』『エピレゴメナ』という、ごちない、学術的タイトルに対してお詫びしておきたいと思いますが、それらは実はわたしの主要著作『テミス』に対するこの二冊の関係を表わしているのです。

コペンハーゲンには少数ですが、貴重な壺のコレクションを所有しています。ずっと前から、わたしはそこへ行くつもりでした。それで、ある友人がヨットでそこへ連れて行ってくれると申し出たとき、わたしは喜びました。幼年時代を海と荒野 [ムーア] で過ごしたもので、わたしは常に海と航行に情熱を抱いていました。ところが、わたしときたらひどく船に弱いのです。そんなわけで、わたしを親切にも自分の

ヨットに乗せてくれる友人たちは、いつでも後悔する理由があるわけです。その航海はのっけから災難でした。北海に出るや時化に遭遇したため、わたしたちを乗せたヨットは、わずか二十トンの小帆船ですが、相当危険な状態になりました。カウズ [Cowes イングランド南岸沖、ワイト島北部の海港] のドックに舞い戻ったとき、わたしたちが海底の藻屑とならなかったのは不思議だと言われたものです。甲板をのたうちまわりながら、頭上高くから大波が落ちてきて、わたしたちをあわや飲み込もうとするのを目にしたきり、それを最後に、わたしはまるで何も覚えていません。そのまま意識を失ってしまったのだと思います。なにしろ、わたしが目覚めたのは天国であって（そう思えたのですが）至福そのものの状態にあったから。周囲には青いガウン、飾りリボン付きの帽子姿の天使たちがひざまづいています。天候陰悪のため、われわれはいつしかヘリゴラント [Heligoland] の湾内に入りこんでいたのです。そこで、わたしはボートに寄せられて、船上では一人でも人手が必要だったので、わたしは砂浜に放置されました。そうして、ヘリゴラントの女たちがわたしを見に群がったというわけです。荒れ狂う海から救助されたのだと思いますが、わたしはそのとき、肉体的苦痛の後におとずれる肉体的恍惚の深さというものを初めて知りました。われわれは悪天候のため数日間足止めを食ったものの、やがてアイダー運河 [Eider Canal] 内へと船を進めました。そこは平穏そのものでした。終日、哲学談義を戦わせてから、——なにせこの船の持主ときたら大胆にして熟練の船乗りであるばかりか、徹底して物を考える人だったので——わたしたちは片足コウノトリの長い列の間をゆっくり進んで、バルチック海へと出ました。まじかにフィヨルドとブナの林が迫って、その木枝が水中に浸かっていました。バルチック海は《細波のたつ》不愉快な海ですが、十分に回復したわたしは、コペンハーゲン湾内に向けて、ヨットの舵を取ったことを誇らしげに思い出します。そこで、わ

たしは正直とは何かということを学びました。博物館の管理者は最初の日にはわたしに会いましたが、二日目は他に用事がありました。彼はわたしに巨大な鍵束を預けて、その場所を自由に使わせてくれました。わたしはヨット付属のボートを、運河の中に、博物館のドアの傍らにつけておいたから、その気なら楽々と博物館全体を略奪することもできたでしょう。しかし、屈強なスカンジナビア人の間では、こうした行為はぜったいになされないように思えます。でも、わがイングランドの大英博物館では、わたしが仕事をしている間は、職員が一人必ずわたしについています。表面上そこにいるのはわたしを手伝うため、でも、本当は警官としてなのですよ。フランシス・ダーウィン卿 [Sir Francis Darwin] からこんな話を伺ったことを思い出します。ストックホルムで、あるスウェーデンの友人と二人で橋を渡っていて、舗道に金時計が落ちているのを見かけました。サー・フランシスが立ち止まって、それを拾いあげ「これは警察へ届けなければいけないようだ」というと「いや、いや」と相手のスウェーデン人が応じました。「まあ欄干にでも置いておけば、それで大丈夫さ。なにしろ、それを失くした者はきっと戻ってくるからね」かりにロンドン・ブリッジの欄干に金時計を置き忘れたとしてごらん下さい。たぶん、それは持主をそう長くは待っていないでしょう。それでも、われわれは英国人は正直な国民だということになっているのですからね。

ストックホルムでは、わたしはその先史大博物館を見に行っただけですが、ひどく失望しました。その街が「北方のヴェニス」と呼ばれることは知っていました。むさ苦しさの寸前という点まで共通しています。ストックホルムには唯一の美しい建物がありますが、それはフランス人の建築にかかるものです。多くの者はかりに水と島々や湖を見ると、それが美しいに違いないと感じているのだとわたしは悟るようになりました。同様に、山々は常に美しくて感激させるものだと思ふのです。わたし

にとっては、マッターホルン [Matterhorn アルプス山脈の高峰、4478メートル] はおよそ自然界のうちでもっとも醜いものの一つで、まったくちょうど巨大な牙を引き抜いて、ひっくり返したものに他なりません。ところがそれでも、観光シーズン中は毎晩、リッフェル・アルプス・ホテル [Riffel Alp's Hotel] のテラスは、マッターホルンを眺めてうっとりし、造物主の御技になる美景として称賛する大執事 [アーチディーコン、主教ビショップを補佐し、教区司祭パリッシュ・プリーストを監督する重要職。17世紀以後司祭がこれに当たった] たちで群をなすのですからね。

ペテルブルクへは一人きりの旅でした。もっぱらエルミタージュ美術館 [Hermitage エカテリーナ二世が宮廷博物館として建築した] 所蔵のケルチ [Kertsch] [ロシアのクリミア地方にある港湾都市] 出土の考古物を見に行っただけです。わたしはロシア語をまるで知りませんでしたし、そのときは、ロシアにもぜんぜん関心がありませんでした。わたしの目は「ありし昔のギリシアの栄華」 [Edgar. A. Poe 1809-49. 「To Helen」] でさし当たり目がくらんでいたのです。わたしはすでに大英博物館から紹介状を数通もらっていたから、すぐに華美な部屋に案内されました。室内には、さらに華美な役人が煙草をくゆらせながら座っていました。彼は鄭重、親切そのものでした。「何かわたしにできることがありますか？ あなたは誰それをごぞんじですか？ 何それをご覧になりましたか？」ところが、ケルチのことには何も触れません。わたしは今では確信していますが、彼はその名前は知っていたに違いないけれど、その考古学的価値はぜんぜん知らなかったし、ましてやケルチが古代アテネの植民地だったということなぞ知る由もなかったのでしょう。ついにおずおずと、わたしは自分の用件を切り出そうとしました。「あれらの壺をそのケースから出していただけますか？ ここには、ステファノス [Stephani古典学者?] の手でまだ公表されていないもので、わたしが拝見できるものが

ありますか？」相手はやや呆然としたものの、それから、深くくぼんだその目をぱちくりさせながら、もし社交界の事柄や宮廷の関係で、自分でもって何か役に立つようなことがあれば、なんなりとご用命していただきたい。しかしながら、こうした学術的な事柄については、自分の頭脳として十分行動することができる紳士を、あなたにご紹介したいがよろしいでしょうか？そこで、彼は意味ありげに自分の形のよい、空の頭に触れると、わたしを遠い部屋へと連れていきました。そこには、書類と土器の破片の山に埋もれて、みすばらしいドイツ系のポールが働いていたのです。彼は有能な専門家であることがわかりました。わたしはあの無骨者にはそれっきりお目にかかりませんでした。きっと、彼の方でも「気違いじみた英国女」を厄介払いできて、さぞ喜んでいただことでしょう。わたしはこの優しい人物を好きにならずにははいられませんでした。彼はロシア人のみに特有な、あの素朴で、完全な態度をもっていました。ところが、当時のわたしは凶暴な道德家「モラリスト」でしたが、彼のごく打ち解けた、厚かましい不適切な振る舞いは、わたしを時ならぬ過激派「ボリシュヴィキ」にしたのです。しかし、ああ、なんてこのわたしは馬鹿、なんて間抜けだったんでしょう、それを知らずに、ロシアを後にすることになったとは！わたしはごく楽々とトルストイへの巡礼詣りをすることもできたのに。ドストエフスキーに会うことさえできたかもしれないのに。とにかく、一度に一つのことしか見られないということが、一生涯、わたしの陥りがちな罪だったのです。わたしは焦点を絞る過ぎて目がくらんでいました。わたしは手ひどく、永遠に罰せられています。わたしの夢の街、モスクワとキエフを目にすることは二度とないでしょう。

文字どおりに、わたしの夢について。生まれてこのかた、二度だけ重要な夢を見たことがあります。これはその一つ。ロシア革命のすぐ後のある晩、わたしは自分が大きな、ひどく古い森——ロシアでなら《夢見る森》と呼ばれるよ

うな森にいる夢を見ました。そこには円形に開けた空地があって、その場所にはとても大きな熊が群をなして、やさしく踊っていました。どういうわけか、わたしは自分が熊たちに今では廃れたスクウェアダンス、《Grand Chain in the Lancers》「グランド・チェイン」とは男女が互いに反対方向に次から次へとパートナーを変えて進むの踊り方を教えに来たのだと知っていました。ちっとも怖くありません。ただもううれしくて、誇らしかった。わたしは近づくと、熊たちに手をつなぎ、サークルを組ませようと思いました。が、うまくいきません。何度もやってみましたが、かれらはただ後じさりして、丁寧な手を振るばかりで、ひたすら自分たちの神秘的な営みに熱中しています。そのとき突如、こうした営みがどんな《グランドチェイン》よりもすばらしく、美しいかを、わたしは悟ったのです（それは、じっさいまたそうでしょうか！）。わたしは教えるのでなく、学ばねばならなかったのです。わたしは鼻を折られた恍惚感に、さめざめ泣きながら目を覚ましました。

これはロシアがわたしに意味したものを表わしているのかも知れません。でも、どうぞ誤解のないように。わたしを惹きつけたのは《スラヴ魂》ではありません。いや、それどころか、ロシア文学でさえありません。もちろん、何年も前に、わたしはツルゲーネフとトルストイとドストエフスキーを読み、敬服してはいたものの、少なくとも、最後の二者については、魅了されたというより怖がっていました。わたしはかれらの抉るような辛辣さになかば憤慨していたし、たとえば『白痴』の結末やドミトリー・カラマゾフとグルシェンカの間のシーンなどは、わたしの目には芸術において認められる限界を超えているように映りました。それらはあまりにひどく、またあまりに奥深くまで傷つけたのです。いえ、わたしを魅惑したのはこうしたすさまじい事柄ではありません。それはまさしくロシア語だったのです。もしも人生を最初からもう一度をやれるものなら、わたしは藝術でも文学でもなく、言語に一生を捧げたいもの

です。人生そのものは人に痛手を与えるかもしれませんが、いつでも、いつでも、人は言語に慰めを見いだすことができるのです。言語は絵画や音楽や文学に劣らぬほど確実な慰めの手段です。それは人生を反映し、解釈し、耐えられるものにします。ただ、それは現実よりも広い（なぜなら、より無意識的だから）人生なのです。

結 び

これまで、わたくしは人のことばかりで、本ことはまるでお話ししてきませんでした。でも、わたしの人生に対する書物の影響は親しく、絶え間の無いものでした。最初にロンドンに出て来たとき、わたしはロンドン図書館 [London Library] の生涯会員になりました。ロンドン生活は出費がかさみましたが、書物を絶えず欠かさず、少量のタバコを切らさなければ、もしも最悪の事態が重なった場合に、たとい救貧院 [Work House] 行きになったとしても喜んで耐えられるだろうと思いました。三冊の本がわたしの考えの三段階をなすものとして際立っています。アリストテレスの『倫理学』、ベルクソン [Henri Louis Bergson 1859-1941 フランスの哲学者] の『創造的進化』、それにフロイト [Sigmund Freud 1856-1939 オーストリアの精神科の医師。精神分析の鼻祖。『夢判断』1900] の『トーテミズムとタブー』です。生まれつき、わたしはプラトン主義者でしたが、わたしにはアリストテレスはプラトン以上に役立ったように思えます。たまたま『倫理学』がケンブリッジでのわたしの年度の指定図書に入っていました。アリストテレスのもたらす解放感というものは、わたしのように福音主義 [Evangelicalism 神の子としてのキリストの贖罪による靈魂の救済を信仰の中心観念とする] の偏狭な学校で育てられてきた者でなければ、まずもってわからないに違いありません [心の広さはあらゆる美德の極致であるとアリストテレスは考える]。なにしろ常に絶えず《罪の意

識》で育てられ、《死神と最後の審判》を突きつけられ、どちらを向いても《地獄か天国》が待っているのですもの。それは風癲病院から大学の閑静な中庭へと出て来たようなものです。ここではすべてが自由と正気そのものであり、何によらず自分の思いどおりになったのです。《中庸の徳》という理論は、《原罪を背負って生まれた》者にとって、なんたる向上であり啓示だったことでしょうか！《動因 [エネルギー]》や、個人の能力の行使としての《至高善 [summum bonum]》という [アリストテレスの] 観念は、「神は万能である」と教えられてきた者にとって。さらにまた、当然のことながら友情を含むはずである《完全な生活》の観念は。わたしは、これははたして本当なのかしら、束縛の鎖はじっさいに破られ、牢獄の扉は開け放たれたのだろうかと考えながら、ケンブリッジの庭をあちこち歩きまわったことを思い出します。

一九〇七年に『創造的進化』が出ました。断続的に、わたしは生涯にわたってヘラクレイトスからウィリアム・ジェームズ [William James 1842-1910 米国の心理学者・哲学者。ヘンリー・ジェームズの兄。『プラグマティズム』] に至るまで哲学を読んできましたが、近年は読むことがますます少なくなりました。なにも新しいものを得ずに、ただ絶え間無くカードの札を切っているばかりで、同じガラス玉をもてあそんでいるように感じたためです。ところが、あのとき突然、この新しいモーゼが岩を打って、こんこんと流れが砂漠に湧きでたように思われました [旧約「出エジプト記」17: 5-6]。でも、これはヨーロッパにあって、ものを考える人間なら誰でも与かった経験ですから、改めてわたしが述べるには及ばないでしょう。

フロイトに関しては、まったく事情は別でした。わたしは気質からすると、貞淑ぶる方ではありませんが、まがりなりにもピューリタン [英国国教会の繁雑な儀式の浄化と道德の厳粛を唱えた清教徒の流れ] です。フロイトの醜悪さに最初はまったくもって胸が悪くなりま

したよ。わたしは病室が嫌いですし、あらゆる強迫観念と狂気には肉体的な恐れを抱いています。それでも、この性的なぬかるみの全体の陰と底には、なにか大きな、真実のものと感じて、もがきながら進んで行きました。そうして、幸運にも『トーテミズムとタブー』に出会ったのです。そこで、たちまちぱっと光がさしこんできて、わたしは再び解放感を感じました。ここには巨大な建設的な想像力があります。ここにはかつていかなる古典学者もしたことがないようなやり方で、ギリシア演劇の起源の秘密を明らかにする、そんな医者がいるだけなのです。彼はトーテムとタブーがほんとうは何を意味するかを人類学者に説き、罪と神聖と秘跡の神秘を突き止めようとしたのです。フロイトは人間の魂を理解したがゆえに、人間の魂から恐怖を取り除いたのです。わたしは治療学の方法としての精神分析には信頼を寄せていません。芸術の心理学については、ロジャー・フライ [Roger E. Fry 1866-1934 英国の美術批評家・画家、《Postimpressionism 後期印象派》の命名者、1910年に初めて英国で《後期印象派展》を開いて、当時の美術・文学界に大きな影響を及ぼした] 氏が正しく、フロイトはまったく間違っていると確信していますが、それにもかかわらず、今後の何世代にもわたって、人間知識のほとんどあらゆる分野が、フロイトの想像力によって豊かにされ、啓発されるだろうということを確信しています。

自分の一生を振り返ってみると、立ち止まったり、つまづいたりしながら、わたくしは自分自身の専門分野までもとかく歩んで来たものだと思います。専攻としてのギリシア文学はわたしには閉ざされていると、若いころのわたしは感じました。当時のケンブリッジが知っている研究方法は、本文批評 [テキスト・クリティーク] のみであり、その方面で実りある成果を上げるのに、わたしの学識は決して向いていなかったからです。われわれ《ギリシア学者》は、正直なところ、当時《暗闇にじっと座している人々》でした。しかしやがて、一つの偉大

な光、いや、二つの偉大な光——考古学と人類学 [アンソロポロジー] を目にするようになりました。古典学は長い眠りを終えつつあったのです。老人たちは幻影を見はじめ、若者たちは夢を見はじめました。シュリーマン [Heinrich Schliemann 1822-1890 トロイの発掘で有名、自伝『古代への情熱』] がトロイで発掘を始めたのは、わたしがケンブリッジを出たばかりのときでした。わたしの同時代人の中に J. G. フレイザー [James G. Frazer 1854-1941 英国の宗教学・民族学・古典学者] がいましたが、彼はやがて『黄金の枝 [Golden Bough 金枝篇]』の輝きで未開の迷信の暗い森を照らしだすことになりました。その本の幸運なタイトルは——サー・ジェームズ・フレイザーはタイトルをつけるのに見事な才能をもっています——学者たちの注意を向けさせました。かれらは比較人類学のうちに、ギリシア語やラテン語のテキストをじっさいに解明する重大なテーマを見いだしたのです。タイラー [Edward B. Tylor 1832-1917 英国の人類学者・比較宗教史家、《アニミズム説》の提唱者、『原始文化』] はすでに著作、講演活動を始めていたし、またロバートソン・スミス [Robertson Smith 1846-94 スコットランド生まれの英国の聖書研究者・東洋語学者『セム族の宗教』] は、異端として追放されたものの、すでに「東方の星」を目にしていました。が、無駄でした。わたしたち古典学者は、見ざる聞かざるよろしく、耳をふさぎ、目を閉じました。ところが、『黄金の枝』という魔法の呪文を耳にただけで、目からうろこが落ちたのです——わたしたちは耳を開き、理解しました。それから、アーサー・エヴァンズがかれの新しいアトランティス [伝説的な島 Atlantice ここではクレタ島をさす] に向けて出帆し、かれ自身の迷宮 [ラビリンス] からミノタウロスのニュースを打電して来ました。いやも応もなく、わたしらはこれは重大なことだと悟りました。それは《ホメロス問題》にも影響を与えました。

生まれつき自分は考古学者ではない——まし

てや人類学者ではないと、わたしは確信しています。なにしろ「異教徒の汚らしい道具類」なぞわたしにはうんざりで、胸が悪くなるからです。ところが、珍しい経験の抗いがたい波に押し流されて、わたしは考古学と人類学の両方に首をつっこむことになりました。今では、わたしはそうして良かったと思っています。両方ともわたしの本当のテーマ——宗教にとって必要だったからです。もっとも《宗教》といった場合、わたしはすぐにみずから訂正しなければなりません。わたしを熱中させるのは《宗教》でなくて《祭式》なのです。わたしは他のところで『古代藝術と祭式』Art and Ritual』《藝術》は《宗教》の侍女ではないこと、「藝術」はある意味で《宗教》から生まれること、それらの間を結びつけるもの、かけ橋が存在するが、そのかけ橋こそが《祭式》であるということを示そうとしました。その橋の上で、心情的には、わたしは立ち止まるのです。《宗教》にも《藝術》にも癒されないような、わたしのうちの何かを《祭式》は満足させるのです。祭式の踊り、祭式の行列は、付属する祭服や明かりや松明とともに、わたしを感動させます。どんな説教、どんな賛美歌、どんな絵画、どんな詩歌にしても、わたしにそれほどの感動を与えませんでした。たぶん、それはわたしには行列が、目の前に捕らえられ、固定された人生のように、持続〔duree〕そのもののよう思えるためでしょう。二度だけ、祭礼の踊りを見たことがあります。最初のはセヴィリア〔スペイン南西部グアダルキビル河畔の都市〕にある大聖堂〔カテドラル〕内にある高い聖体拝領台の前で行われた《Seises》の踊りです。わたしが見たのは謝肉祭〔カーニヴァル〕の折りでした。これは率直に言って異教だなど直感しました。その起源は、ローマ・カトリックが率直に認めるように「時の闇のうちに失われて」います——わたしたちが推測できるのはただ、それが《母親と息子》に捧げられるクレタの《Kouretes〔若者たち〕の踊り》に起源をもっていたということです。この踊りは沈む太陽への祈り、光明と

癒しの祈りを伴っていました。六人の聖歌隊員〔コリスター〕の行う仕草は、すでに単一の形式的なステップにまで退化しています。それはどこかこわばった、堅苦しい影のように、装飾的で、むしろ格式ばっています。ところが、高い祭壇と黄金の格子窓と、なかでも耳障りな、響き渡るスペイン語の音声を素晴らしい背景として、それが溶暗のうちを動いて行くさまは異様なものです。偉大なる〔異教の神〕パン〔ギリシア神話の牧神、森・原野・牧羊などの神、頭は山羊に似て、葦笛を吹く〕は確かに死にましたが、その霊はなおも踊りつづけるのです。

つい昨年、わたしはこのセヴィリアの踊りとごく対照的な、不思議な祭礼の行列を見ました。これは毎年エフテルナッハ〔Echternach〕で、《Pentecost〔聖霊降臨祭・五旬節〕》後の火曜日に催されます。これは、おそらく、ヨーロッパで見られる祭礼の踊りの中でも一番活気のある遺風だと思います。ルクセンブルクの貴婦人マダム・エミル・マイエリッシュ・ド・サン・ユベール〔Madame Emile Mayerisch de Saint Hubert〕のご好意でつぶさに観察することができました。その踊りの行列は現在ではわがサクソン族の聖人セント・ウィリブロード〔St. Wilibrod〕を祝って行われますが、これは明らかに呪術の時代にまでさかのぼるものです。踊り手たちは小さな町の下手にある橋のもとに集合します。そして、進むにつれて数を増しながら、かれらは街路を踊り歩き、そこで立ち止まっては、最後にバシリカ聖堂〔宗教的特権を与えられた七つの聖堂の称号〕に到着するのです。その踊りは呪術的なものなので、町じゅうを隈なく練り歩く必要があります。聖職者たちがつき添っていますが、だれもかれもが踊ります、というより跳びはねるのです。なにしろ、それは跳びはねるステップなのです。クレタの《Kouretes〔クレテス・若者たち〕》と同様に、かれらは「健康と富貴を願って跳びはねる」のです。よばよばで、ほとんど歩けそうにない老婆をわたしは見まし

た。が、それでも、彼女は「踊りで足を上げた」のです。また、病気の赤子を抱えている女を目にしましたが、彼女は病が癒えることを願って踊りました。けれども、踊ったのは、たいていは若者たち《Kouretes》でした。

祭礼の踊りほとんど死に絶えました。が、祭礼の演劇、《歳神》[Year-Spirit]の死と再生は、今でも行われています。わたしがそれを実感したのは、初めて、ロシア式で行われたミサ[聖体礼儀]を聞いた時のことです。それは事実上ギリシア式の祭礼なのです。そこでは秘儀が、演劇に先行する《歳神の死と再生》の秘儀が、実際に演じられるのです。ただ、その様子は隠されていて見えません。司祭が黄金の門の後ろから出て来て、ことの成就を告げます。これはギリシアの演劇で《死と再生》を告げる先触れ[Messenger]から生じたものです。ローマ・カトリック教会は、残念ながらその秘儀を台なしにしまいました。聖別の儀式は聖体拝領台の前で公開で執り行われるので、そのため、その重要性をかなり失ってしまいます。

わたしがこれらの祭礼の踊り、この祭礼の演劇、芸術と人生の懸け橋のことをとりたてて述べるのは、これこそわたしが一生かけてやみくもに探し求めてきたものだからです。およそ時代の鎔を帯びていないものは、わたしにはほとんど魅力がありません。文学におけるあまたの偉大な作品、たとえばギリシアのさまざまな演劇作品を、わたしが一番楽しみ味わうのは、それらの素晴らしい光輝の背後に、もっと暗く、もっと古いさまざまな形態が動いているのを見るときなのです。それがわたしの《ワガ生涯ノ弁明[生きがい]》なのに違いありません。

回想録を閉じるにあたり、《死神》が近づくのを前にして、人生がどう見えるかについて、なにか感想を述べるのがふさわしいというものでしょう。《死》についていえば、まだ若いころには、わたしには生命身体の不滅は自明のことだと思えました。《死》を考えることだけ

で、わたしはいきり立ちました。猛烈に元気だったので、わたしは誰にしても、何にしても——神や悪魔や、はたまた《運命》の女神にせよ——できるものなら、自分を追い出してみろ、という気概でした。でも今ではすっかり変わってしまいましたよ。もしも《死》を考えるにしても、それはたんに生の否定、終わり、最後の避けがたい和音としてです。わたしが恐れるのは病気ですね。つまり悪い、調子の狂った生です。《死》ではありません。そして病気からは、これまでのところ免れてきました。わたしは生命身体の不滅については少しも希望もっていません。未来の生に対してさえ、なんらの願望もっていません。わたしの意識はわたしの身体とともにごくつつまじやかに始まりました。わたしの身体とともに、ごくひっそりと、わたしの意識が終わればよいと思っています。

Nox est perpetua una dormienda.

永遠の眠りの夜がおとづれる。

[カトゥルス. 前84-54ころ. ヴェロナの人. 『歌章』カルミナV歌. 5行]

それに、こんなことも考えます。わたしたちは自分のうちに一つではなくて、二つの生命の種子を宿しています。それは種族の生命と個人の生命です。種族の生命は種族の不滅をめざし、一方、個人の生命は生まれ落ちたときから《死の誘ない[l'attrance de la mort]》を感じています。単細胞動物は事実上は不死といえるでしょう。一方、個人という複合体は死ぬという結果になります。結婚せず、子供も持たない者たちは、種族の不死の生命から関係を断って、個人の生命に身を捧げているのです。それは待避線であり、袋小路にすぎませんが、それでも、たしかにそれ自体で究極の目的をなしています。なにやら奇跡的に、わたしは結婚を免れました、どうしたものでしょうか。なにしろ、一生のあいだ恋愛したんですもの。でも、全体としては、わたしは満ち足りています。多

くを失ったとは思っていません。むしろ、より多くを得たと信じています。結婚は、少なくとも女性にとって、友情と学問との妨げとなります。この二つのおかげで、わたしの人生は素晴らしいものとなったのです。男性のうちにわたしが求めたのは、常に友人であって、夫ではありませんでした。家庭生活には一度も心を惹かれたことはありません。それは最善の場合でも、わたしにはむしろ狭くて利己的なもの、最悪の場合は、個人的な地獄であるように思えます。妻と母親の役割は生易しいものではありません。他のことで頭が一杯だったのですから、わたしなぞは結婚したらひどく失敗したかも知れませんね。他方で、わたしは生れつき共同体向きの才能を持ち合わせています。それはわたしには正常で、開けた、経済的にも正しい権利であるように思えます。広い場所と落ち着いた図書室をいくつか備えた大きな講堂〔ホール〕で、ゆったりと、けれども、むしろ簡素に生活したいものです。朝には、大きな、静かな庭園をまわりに感じながら、目覚めたいものです。こうしたことは個人の家庭では禁じられており、禁じられるべきですし、あるいはやがて禁じられるでしょう。でも、それらは共同体にとっては正しく、良いことです。もしもわたしが裕福でしたら、女性のための学術共同体を建設したでしょうに。それは一生を捧げる誓いと美しい規則と習慣を伴う共同体です。実際のところ、わたしは大学の学寮で生涯の多年を過ごしたことに満足しています。たぶん、文明が進むにつれて、家庭生活はかりに消滅しなくても、少なくともはるかに修正され、抑制されたものとなるのではないのでしょうか。

年を取るのはほんとうによいことで、楽しいことですよ。それはなるほど、舞台の上からはおだやかに押しやられますが、今度は観客としてとても心地よい席を与えられますし、もしほんとうに自分の役を演じたのであれば、ゆっくり腰を下ろして舞台を見ることに、心から満足するものです。生活はすっかり緊張がゆるみ、ずっと落ち着いて、あたたかなものになりました。

た。あらゆる種類のちょっとくつろいだ肉体的気ままも許されます。つまらない講義の間じゅう居眠りをしているでもいいし、退屈したら早めに床についてもよろしいわけですからね。若い人たちはみな優しい敬意を払ってくれますが、ほんとに身に余ることです。誰もがすすんで助けてくれます。まるで世界中が親切な、保護の手を差し伸べているような気がします。人生は年をとっても、終わるわけではありません。それはゆたかな変化を蒙るだけです。あなたはやはり愛しつづけます。ただ、その愛情は燃えさかる、灼熱の炎ではなくて、秋の日のやわらかな日差しなのです。あなたはやはり恋に落ちさえます。それも、相も変わらぬ愚かな理由で——相手の声の調子、常ならぬ目つきの輝きといった——ただ、その恋はごくおだやかなものになります。そして、老年になって、男性にこんな気持を打ち明けることさえあるかも知れません。わたしはあなたと一緒にいたい、それはあなたがわたしと結婚したいからとか、わたしがあなたと結婚したいと思っているからではないのと。

そうはいっても、とにかく「年寄り孤独なもの」。ただ、このわたしを見習えば、ちがいますよ！ わたしの友人たちはあらかた、男性、女性を問わず、わたしより二十歳ほど若い人ばかりです。わたしには七十になってから親しくなった唯一の友人ガイ・ル・ストレンジ〔Guy le Strange〕氏がいます。わたしがそう見なすのをあの方が許してくださればの話ですが。あの方は七十を超えたこのわたしに、この上もなく辛抱強く、親切に、ペルシア人の四大〔宇宙を構成する地水火風の要素〕、わたしの心に至る確実な道を教えてくれました。それにつけても、《運命の女神》がわたしにとっても親切だったことは認めます。老年になって、《運命》はわたしに精神的な娘を、わたしを慰安するために授けてくれたのですもの。それは血肉をわけたどんな子よりも愛しい娘、こんな《グレッグおばさん》の子孫としては、

あり得ないほどに才能ある娘〔Miss Hope

Mirrlees のこと」です。

ケンブリッジを去ってからのわたしの人生について、さらに話をつづけたいと思います。なにしろ、わたしは後ろ髪引かれる思いで、ケンブリッジを去ったのですから。二、三の問題に自分の精神をひたすら集中する、そんなアカデミズムの狭い生活をあまりに長くつづけてきたと自分で感じはじめていました。わたしは最期を迎える前に、ものごとをもっと自由に、もっと広く見たい、とりわけ、別の文明に新たに焦点を合わせたいと望んだのです。わが《心から願う地》ロシアはわたしには閉ざされていました。フランスとフランス内のアメリカは、わた

しを親切に受け入れてくれました。このことは本当にありがたく、忘れることができません。

せめて、わたしがパリとポンティニ [Pontigny] で知り合いになった、フランス人とロシア人の素晴らしい、新しい友人たちについて話すことができたらいのですが！ でも、こうしたことはあまりに最近の、あまりに身近なことから——これで、わたしのお話は終わりにしなければなりません。

パリ、シェヴルーズ通り四番地
アメリカ女性大学クラブ
（『ハリソン自伝』了）